

## ■ テクニカル的にドル/円はリバウンド局面入りと見られるのだが…

ようやく米中通商摩擦への懸念が後退したかと思えば、今度はシリアを巡る中東情勢への懸念の高まりである。米大統領は「一両日中にも軍事行動の是非を判断する（11日時点）」との考えを示しており、目先は米・日株価やドル/円、クロス円の上値を追うことも難しい。せつかく3月期末を通過し、新年度入りで本邦機関投資家や事業会社などが新たにリスクを取りに行く動きが期待されるどころだというのに…これでは当面、事態の行方を見守って行くしかない。

目先、英仏との調整のうで米軍は行動に移るという算段になるが、今回の事態は「昨年の米軍による空爆がアサドの暴挙に対する抑止力にならなかったと証明するようなもの」であるかも知れず（化学兵器使用の証拠を示せないとなんも断定できない）、作戦の計画を立てるのも容易ではなからう。「数日間に渡って包括的な軍事作戦を展開」などということになれば、市場はあらゆるリスクを想定したうで十分に備えようとするだろう。

ただ、テクニカル的に見ると既に円は下落局面に突入していると見ることもでき、下図でも確認できる通り、ドル/円にしても 3/23 安値を底に目下はリバウンド局面を迎えていると捉えることができるように思われる。あくまで当面はシリアを巡る中東情勢の行方が材料視されやすいことを承知のうで、一応はテクニカル面も押さえておきたい。

まず、ドル/円は3月下旬から4月初旬にかけて21日線を攻略し、すでにクリアに上抜けている。今さら言うまでもなく、この21日線は年初来長らくドル円の上値を押さえ続けてきた。過去を振り返ると、21日線を下から上に突き抜けた後のドル/円は暫く上値追いの展開が続いていることがチャート上でも確認できる。



また、一目均衡表の日足の「遅行線」が久しぶりに日々線を上抜けてきていることも上図において確認できるだろう。これも今年1月初旬以来のことで強気転換の兆候の一つと見ておきたい。何より、昨年11/6に114.73円の高値をつけてから長らく繰り返されてきた「高値切り下げパターン」が、4/5に一時107.49円まで上値を伸ばした（3/13高値=107.29円を超えた）ことで終了したと考えられる点も見逃せない。

目下は一目均衡表の日足「雲」下限にわかりやすく上値を押さえられており、これはなかなか手強い“壁”であるが、それだけに突き抜けた時のインパクトは小さくないとも思われる。2016年12月高値から形成されてきた「下降チャネル」下辺付近からの切り返しでもあり、本格的なリバウンド局面入りとの見方もできないではない。

(04月12日 11:00)